

1 京都府のコケ植物相（希少種の状況）

京都府は地理的には暖帯から温帯に位置し、ほとんどの地域が照葉樹林帯に属し、ブナ帯は府北部の山地に存在するだけである。そのため、希少種は、1) アジアの熱帯や亜熱帯に広く分布し、日本まで分布を広げている南方系の種と、2) 温帯から亜寒帯に分布し府北部のブナ帯まで降りてきている北方系の種に多い。そのような種の例として、南方系の種としては、蘚類ではクマノゴケ、タチチョウチンゴケ、シロハイゴケ、キヌヒバゴケ、オオヒラツボゴケなどを、苔類ではカビゴケ、ヨウジョウゴケ、イボヨウジョウゴケのようなクサリゴケ科の葉上苔類（ただし、京都府内では、カビゴケとヨウジョウゴケを除いては、葉上ではなく樹幹に着生する）やヤマトムチゴケ、ナンヨウサンカクゴケなどをあげることができる。

北方系の種としては、蘚類ではクマノチョウジゴケ、コシノヤバネゴケ、アオモリカギハイゴケ（ササオカゴケ）、サワゴケ（マキバサワゴケ）などを、苔類ではミヤマホラゴケモドキ、マルバヤバネゴケ、エゾヒメヤバネゴケ、アカヤバネゴケ、タカネシゲリゴケなどをあげることができる。北方系の種でも、蘚類のハリミズゴケ、苔類のケスジヤバネゴケのような種はミズゴケ湿原（左京区深泥池）を生育地としている。

環境的に見た時、溪流沿いの湿った岩の上にはジョウレンホウオウゴケ、ヤクシマツガゴケ、ナガクビサワゴケ、エゾヒメヤバネゴケ、ヤハズツボミゴケ、ヒメツボミゴケなどの希少種が、雲霧がよくかかる尾根筋の岩場にはアイバゴケ、フサアイバゴケなどの希少種が、また暖帯林の樹幹にはヒメウスグロゴケ、キノクニオカムラゴケ、イトヤナギゴケのようなウスグロゴケ科やカゴシマヤスデゴケやシコクヤスデゴケのようなヤスデゴケ科の希少種が生育し、ブナ帯の森林内の腐木上にはクチキハイゴケ、コマノハイゴケ、フタバムチゴケ、エゾヤバネゴケなどの希少種が見られる。また、府内ではまれな石灰岩上（左京区鞍馬山）にはホソヒラゴケ、カハルクラムゴケモドキ、蛇紋岩上（与謝野町赤石岳）にはマルバクラマゴケモドキなどの希少種がはえている。

人里近くの池や水田などの周辺には、苔類のウキゴケ科の種がよく見られるが、そのような場所では近年、生育環境が悪化し、ウキゴケやイチョウウキゴケの生育箇所が急速に減少していると考えられる。

地域的にみた時、希少種が多く見られる場所としては、京都大学芦生研究林、福知山市大江町皇大神社内宮、京都市右京区麩村八丁、京都市左京区府立植物園、京都市左京区深泥池、京都市左京区金比羅山、京都市左京区大悲山、相楽郡和束町鷲峰山などがあげられる。これらの場所は自然環境がよく保全されていること、京都府ではまれなミズゴケ湿原が存在すること、山中の湿度が高いところに大きな岩が露出していることなどの特徴を有し、コケ植物についての調査も比較的によく行われており、希少種が発見される機会も多かったものと思われる。

2 種の選定基準

コケ植物の場合、絶滅危惧種の判定に利用できるような過去の報告例や採集データが決定的に不足しているため、またそれぞれの種の府内での分布の状態についての情報も極めて乏

しいため、絶滅のおそれがあるかどうかという観点からの選定は極めて困難である。そのため、今回の調査によって判明した希少種を下記のような基準でランクづけをして選定した。また、過去の生育状況の比較について信頼のおける記録のある一部の種については、現在の生育状況との比較も判定の材料とした。

選定に際しては希少の程度を主要な基準としたが、それ以外にも次の事項を選定の基準として考慮した。

- 1) 環境省のレッドリストに選定されているかどうか。
- 2) 過去に確かな記録がある場合は、減少傾向にあるかどうか。
- 3) 特殊な環境（水生、湿原、石灰岩、葉上着生など）に生育しているものについては、その環境状態の変化と生育状況。
- 4) 京都府では希少ではないが、全国的、あるいは近畿地方の他府県ではそれほど多くないもの。
- 5) 分布上注目し得るもの（隔離分布、分布の北限や南限、日本海側に分布する南方系の種など）。
- 6) 学術的な意味において特記すべきもの（タイプ標本産地など）。
- 7) 京都を代表するような景観の構成要素になっているもの。

なお、現在の段階では選定のために必要なデータが十分に揃っていないとはいえず、希少の程度の判定に困難を伴うケースにしばしば遭遇した。そのような場合でも、判断材料が不十分として該当種を選定から除外するよりも、むしろより多くの種に注意を喚起し、将来の調査のための指針としてもらうため、下記のカテゴリーに該当する可能性のあるものはできるだけ選定の対象とした。そのため、選定種の数がかかなり多くなったことを付記しておく。また今回の調査で新たに府内から見出された全国でもまれな希少種は、要注目種としてリストアップされている。

カテゴリーランクと選定基準

カテゴリーランク	選定基準
絶滅種	京都府内から生育が報告されたが、この 40 年以上にわたって再発見されていないもの。あるいは唯一の生育地が開発等によって失われて再発見されていないもの。
絶滅寸前種	1. 環境省レッドリストに絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）と絶滅危惧Ⅱ類（VU）としてあげられているもので、京都府においても産地が極めて少ないもの（環境省のレッドリストにあげられている種を、すべて自動的に絶滅寸前種とするのではなく、京都府におけるその種の希少の程度に応じて、カテゴリーランクを決めた）。 2. 京都府では産地が 1 か所しかなく、その場所の特性とその種の生態的特徴から考えて、そこ以外には京都府において発見できそうにないもの。
絶滅危惧種	1. 環境省のレッドリストにはあげられていないが、京都府では産地が少なく（産地が 5 か所以内）、近畿地方の他府県でも産地が少ないもの。

	<p>2. 京都府では産地は少なくはないが、全国的には希少なもの。</p> <p>3. 京都府での産地は少なくはないが、確かな記録に基づいて減少傾向にあることを示すことができるもの。</p>
準絶滅危惧種	<p>近畿地方の他府県ではそれほど希少ではないが、京都府では産地が比較的少ないもの（産地が少ないのは、調査が不十分なためなのか、実際に少ないのかは、その種の生態的特徴などから判断し、実際に少ないと推定されるものを選考の対象とした）。</p>
要注目種	<p>上記の三つのカテゴリーにはあてはまらないが、生態的、景観的あるいは学術的に注目に値する事項を有する種を要注目種として、その注目すべき事項とともに記述した。</p>

3 選定種とその概要

総計 141 種が絶滅種、絶滅寸前種、絶滅危惧種、準絶滅危惧種、要注目種として選定された。その内訳は、蘚類では絶滅種が 4 種、絶滅寸前種が 25 種、絶滅危惧種が 31 種、準絶滅危惧種が 17 種で、要注目種が 8 種、苔類・ツノゴケ類では絶滅寸前種が 15 種、絶滅危惧種が 15 種、準絶滅危惧種が 19 種、要注目種が 7 種である。府内で確認された種の総数がおおよそ 560 種なので、その 25.1 %が対象種として選定されたことになる。

選定種を多く含む科としては、蘚類ではミズゴケ科、ギボウシゴケ科、チョウチンゴケ科、ハイヒモゴケ科、イタチゴケ科、キブネゴケ科、キヌゴケ科などが、苔類ではヤバネゴケ科、ツボミゴケ科、ハネゴケ科、クサリゴケ科、ジャゴケ科があげられる。ミズゴケ科はこれまでに府内からの生育が報告された 6 種すべてが選定されているが（うちハリミズゴケは絶滅、オオミズゴケは要注目種）、それらはいずれも希少種であると同時に、園芸用の材料として採集の対象になる可能性のあるものである。ギボウシゴケ科、キヌゴケ科、ヤバネゴケ科は冷温帯に分布する種を多く含み、選定された種の多くは北方系の種である。チョウチンゴケ科、ツボミゴケ科、ハネゴケ科の選定種の多くは、溪流沿いの湿った岩上や腐木上、森林内の湿った場所の土上や腐木上に生育する。イタチゴケ科とキブネゴケ科は府内で確認されたそれぞれ 3 種全てが選定種であるが、これらの種は湿度の高い森林の樹上に生育する。ハイヒモゴケ科とクサリゴケ科は、熱帯から亜熱帯に分布する種を多く含み、選定種の多くは南方系の種である。

今回の報告でも、蘚類 4 種が京都府での絶滅種として報告されることになった。これまでの 40 年間に於いて、複数回の調査によってもその生育が再確認されなかった場合にそのように判定されている。なお、生育が長年にわたって確認されていなかったコアナミズゴケとクマノチョウジゴケは、非常に少量ではあるがそれぞれ深泥池、大原野での生育が再確認された。

要注目種としては、日本からは 3 例目の報告となる府立植物園内で見つかったマゴケゴケがあげられる。同じく要注目種として、近年 4 種に分割された日本産ジャゴケ属のうち、西日本では分布域が限定されるウラベニジャゴケとタカオジャゴケの 2 種が府内における生育が確認されたことは注目に値する。

執筆者 秋山弘之、長谷川二郎